英語「で」学ぶこと―
「未知」と出会い，考え，伝えること ―

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00069772

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

英語「で」学ぶこと

―「未知」と出会い，考え，伝えること ―

英語科　北野　真理恵

本校はSGH（スーパーグローバルハイスクール）に引き続き，WWL（ワールド･ワイド･ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の指定を受け４年目を迎える。学校目標には「地球サイズの教育」を通したグローバル人材の育成を掲げる。グローバル人材が身につけているべき能力の１つに語学力があることは明らかだが，学校の英語の授業は単に英語の訓練に終始する時間ではないはずだ。グルーバル人材に求められる資質・能力とは何か。また，その資質・能力を養う英語の授業とはどのようなものか。本稿は，これらの問いに挑むなかで行った指導に関する実践報告である。

キーワード：グローバル人材　教科書の題材　未知との出会い

１．はじめに

SGHとWWLの指定を受け，校内の会議や研修では「総合的な探究の時間」に関する話題が多い。探究活動の充実に加え，課外活動や各種大会，コンテストへの参加者の増加により，生徒の学びは学校外に大きく広がった。好奇心を追求した実績や挑戦の成果が進路実現につながるケースが増えたこともあり，私自身が年を追うごとに探究活動や課外活動の価値を感じるようになっていることは間違いない。

とはいえ，学校生活において，生徒が最も多くの時間を費やすのは日々の授業である。学校教育の中心は授業であり，授業を通して目指す教育を実践することが，目標に迫るうえで最も効果的なはずだ。

グローバル人材の育成に寄与する英語の授業とはどのようなものか。現時点の私が出す答えは，授業を通して生徒が「未知」と出会い，考え，伝える機会をつくることだ。英語の授業で英語力が伸びるのは当たり前のことで，さらに，授業があったからこそ知る事実，抱く感情，生まれる考えがある，生徒がそう感じる授業をしたい。授業での「未知」との出会いが，授業外での学びのきっかけになるような授業がしたい。私は日々こんな思いで授業づくりをしている。

本稿では，担任を務めた73回生との３年間の「コミュニケーション英語」における取り組みについて報告する。

２．グローバル人材が持つべきもの

私が特に重要だと考えるのは，「人や物事への関心と好奇心」，「相手を理解し自分を伝える力」である。これらは主体性や協調性，異文化に対する理解や課題発見・解決能力など，グローバル人材に求められる他の資質・能力の基礎を成すものだと考える。

関心や好奇心を持つに至るには，まず人や物事について知る必要がある。人は誰でも自分の身の回りのことについては，そうでないことよりも多くを知っている。自分に関係していると感じることについては，そうでないことよりも積極的に知ろうとする。生徒が，授業がなければ知り得ることがないであろう事実や視点と出会う可能性が教科書にはたくさん詰まっている。知ることが，さらに深く知ること，考えること，行動することにつながるかもしれ

ない。教科書が提供する素材を調理し，「未知」との出会いをつくることが授業づくりの鍵だと考えている。すべての題材が万人に響くわけではないが，たった１人でも未来の行動が変わる生徒が出るとしたら，その授業はグローバル人材育成に役立っていると言えるのではないだろうか。

相手の言わんとすることを的確に理解する力，自分の気持ちや考えをわかりやすく伝える力は，円滑なコミュニケーションを行う上で非常に重要となる。使用言語に関わらず，相手との共通基盤が少ない場合には，行き違いや誤解が生じる可能性が高くなる。理解を促すために別の表現で言い換えたり，相手に応じて表現を調整したり，相手に確認したりする力は，多様なバックグラウンドをもつ人々と肩を並べて活躍するためには不可欠だ。授業においては，自分の知識や考えを自分の言葉で伝えるための時間を多く確保している。授業を通して自分を伝えようとする経験と相手を理解しようとする経験を数多く経験することは，コミュニケーションおける寛容さと粘り強さの両方を養うことにつながるはずだ。

３．授業づくりにおいて重視すること

授業は教科書を中心に組み立てた。１年次には単語帳を用いた語彙学習に冒頭数分を費やしたが，単語帳以外に副教材を用いた帯学習等は行わず，授業ではできるだけ多くの時間を教科書の題材に関する学習に充てるようにした。本文の内容理解の助けとして，新出語彙の確認を最低限の予習として課した。

教材研究において力を入れたことが３つある。１つ目は，どのように題材を生徒にとって自分事にするかということ。教科書の題材は，環境，平和，社会貢献など多岐に渡り，今日的で生徒に関心を寄せてほしいと思うものばかりだが，一見どこか遠い場所や昔の話に聞こえることがある。本気の思考や議論を生むためには，自分と関係があることだと認識することが不可欠だ。２つ目は，どのように未知と既知をつなげるかということ。教科書で扱われる題材や本文の内容に関して，授業前の時点で生徒の知識が「0」であるということはほとんどない。人によって程度の差こそあれ，日々の暮らしや他教科の授業を通していくらかの知識を持ち合わせている。生徒にとっての既知の情報を足掛かりに未知に踏み込むことで，生徒は既知の知識や経験を活用しながら思考することができる。人によって授業前に持ち合わせる情報や経験が異なるため，他者の声を聞く価値も高まる。３つ目は，どのように生徒を刺激するかということ。知らないことを知ること自体が学習においては重要な刺激だが，私はそれに加えて，心が動くという意味での刺激のある授業をしたいと思っている。目の前の生徒全員の心が同じように動くことを期待しているのではない。１人でも２人でも，次の学びの芽になるような感情が込み上げる瞬間をつくりたいと思っている。

これら３つすべてを満たすためには，教科書本文を追いかけるだけは不十分であり，題材の背景や関連事項，最新の情報等を幅広く取り入れることで，教科書の内容を深堀する必要があると考える。ニュースや統計データ，動画などを探し，多少難易度が高くても極力そのままの状態で使用した。オーセンティック教材を取り入れることにより，生徒が多様で良質な情報をインプットできるようにしたいと考えるからだ。インプットの質がアウトプットの質を左右するため，良質なアウトプットを期待するには，まず教師が準備するインプットの質を上げなければならない。

授業においては，生徒が英語に触れる時間をできるだけ多く確保した。生徒のインプットのため，文法説明以外は英語で話すようにした。間違いを恐れずに英語を使うこと，言葉だけに頼らずよりよく伝わる方法を工夫すること，相手と協力して対話を発展させること，これらをまずは教師自らがやって見

せることが大切だと考えている。机間指導の際も，生徒への声かけには英語を使うようにした。

そして，アウトプット活動，とりわけスピーキング活動に力を入れた。その際に重視したのは，「自分の言葉で」表現することと相手を意識することの２つである。生徒が使いこなせる語彙や表現を増やすために，教科書本文の音読練習には膨大な時間をかけた。スピーキング活動として一番多く取り入れたのが英問英答形式のスピーチである。本校の生徒の英語力，特にスピーキング力には入学段階で大きな差があるが，どんな生徒にとってもchallengingな（＝やりがいのある，力が試される）活動を行いたいと考えた。１年次は文字通りのリテリング（教科書本文を自分の言葉で話す活動）を通して，本文の表現をパラフレーズすることや文章を再構成することを中心に練習した。１年次の春に思い描いた３年間の最終目標は，話す内容を教科書本文の情報に限定せず，教師の語りや資料からインプットした情報，生徒の知識や経験を交えて題材について語ることだった。何をどんな順番で，どんな言葉を使って表現するかは自由だが，わかりやすく伝えることを常に意識するよう指導した。英語が得意な生徒とそうでない生徒，題材についてよく知っている生徒とそうでない生徒がいても，それぞれの立ち位置で取り組める活動であること，フィードバックをしながら繰り返すことにより生徒が伸長感を実感できることがこの活動の強みだ。

４．授業における実践

73回生「コミュニケーション英語」では，３年間CROWN English Communication（三省堂）を使用した。本稿では，「平和」をテーマとする単元での実践例を紹介する。

➢ １年：Not So Long Ago

「戦争の世紀」と呼ばれる20世紀に撮影された写真が資料として提示される単元である。主要な歴史的事実について，生徒は小中学校あるいは他教科の授業を通して既にいくらかの知識を多く持ち合わせている。そこで，この単元は戦争を知らない世代である生徒たちが，写真を通して歴史に向き合い，平和や暮らしについて考え，自らの思いを言葉で表現し，他者の思いを受け止めるための題材と位置付けることにした。

教科書で紹介される２枚の写真は，1945年に長崎で撮影された『焼き場に立つ少年』と1972年に南ベトナムで撮影された『戦争の恐怖』である。原爆に比べ，ベトナム戦争についての知識は少ないと考え，２つの手立てを行った。１つは，日本史担当教員による授業である。ベトナム戦争が起こるに至った経緯やその被害，当時の国際情勢について解説してもらった。写真が伝える現実の重みを感じ取るには，ベトナム戦争に関する知識は欠かせないものだった。もう１つは，『戦争の恐怖』に写るKim Phucのインタビュー動画（カナダ放送協会（CBC）がドキュメンタリー番組のために収録したもの）である。多くの人に衝撃を与えた写真の少女が，自らの体験と人生をどのように語るのか，彼女の声を直接生徒に聞いてほしいと考えた。

この単元では，“What We Should Remember: A Century of ××”と題したグループプレゼンテーションをすることをゴールに据えた。20世紀に撮影された写真を提示し，その写真が記録する事実とそれに対する考えを４分で発表するというものである。教科書に掲載される２枚の写真と本文は，プレゼンテーションの例となる。生徒は発表準備をしながら数多くの「未知」と出会い，その１つ１つに考えるきっかけをもらったはずである。プレゼンテーションで，多くの生徒が写真の事実が今日の世界や私たちの暮らしに与える影響について語ったことは，自分が生まれる前の出来事と自己とのつながりを探ったことの表れではないだろうか。

➢　２年：Working against the Clock

地雷除去ロボットの開発に従事する広瀬茂男氏を題材とする単元である。地雷という言葉自体は聞いたことがあっても，地雷について語れることはほとんどないという生徒が多いと考えた。そこで，本単元では地雷と地雷を取り巻く問題について知り，考えることを通して，地雷問題を英語で議論できる題材にすることを目標とした。

教科書ではSection 1で対人地雷についての基礎知識が提供されるが，それに加え，感覚的に理解しやすいよう赤十字国際委員会（ICRC）や地雷禁止国際キャンペーン（ICBL）等のウェブサイトから得た対人地雷に関する情報をデータと共に提示した。問題の深刻さを伝える際に数字は非常に有効である。また，教科書に掲載される情報をアップデートすることも欠かさず行っている。教科書編集時には最新だった情報が，授業時には古いデータとなっているからだ。

２年次にはリテリングの難易度を少し上げ，４つのセクションを読み進めるにつれ，語る内容が増えるように問いを立てた。本単元における各セクションの問いは以下の通りである。

Section 1:　What are antipersonnel mines?
Section 2:　Who is Hirose Shigeo?
Section 3:　What did Hirose learn during his first visit to Afghanistan?
Section 4:　Why have Hirose and other Japanese scientists and engineers got much attention recently?

Section 2以降で問いに答える際には，それ以前のセクションの内容も盛り込んで題材について語ることになる。教科書を読み進めるにつれ，生徒のスピーチの内容がばらつき，聞き手にとっての新鮮味が増すという仕掛けだ。

この単元では，気持ちや意見，疑問に感じることを表現しようとする生徒が一気に増加した。地雷という題材自体に「未知」の要素が多かったのかもしれないし，この単元の「単なる技術提供は問題解決にならない」という問題提起が生徒に新たな視点をもたらしたのかもしれない。単に，技術開発やロボット技術に興味のある生徒が多かったのかもしれない。現地の雇用や持続可能な支援の在り方について，想像力を働かせて自分なりの考えをもち，それを言語化しようとする生徒の姿には驚かされた。

➢　３年：Only a Camera Lens between Us

DDR（武装解除・動員解除・社会復帰）の専門家として紛争後の世界の再構築に携わる瀬谷ルミ子氏を題材とする単元である。本文に登場する紛争や子ども兵というキーワードも，ルワンダ，シエラレオネ，スーダンという国も，生徒にとっては馴染みがないものばかりだ。他教科の授業で登場することもなかった国々のようで，どこにあるのかさえ知らない生徒が多くいた。この状態で紛争問題や瀬谷氏の活動に思いを巡らすことは難しいと感じた。そこで，知らなすぎて考えることさえできない紛争やこれら国々について知ることを単元の目標とした。

最初に行ったのは調べ学習だ。本校はWi-Fi環境が整備されており，生徒個人の端末を使用した情報収集が多くの授業で取り入れられている。グループで手分けして，世界各地で多発する紛争について，その背景や原因を調べ，共有した。次に，子ども兵についてUNICEFやSave the Childrenのウェブサイトから得た情報をもとに説明した。子ども兵の年齢や人数といった数字以上に，生徒にとって「未知」だったのは子ども兵の役割だったようだ。

ルワンダ，シエラレオネ，スーダンにおける紛争の詳細は本文にない。紛争の背景には民族，宗教，政治，資源など様々なものを理由とする対立があるが，授業をきっかけにせめてこれら３か国について

は知ってほしいと思った。該当セクションを扱う前に，紛争の経緯や出来事について勉強し，英語で解説を加えた。ここで意識したのは，生徒の既知の知識や日本での暮らしと関連づけること。３か国の紛争が，キーワード１つでも，地理や歴史の授業で学んできたことや自分の生活と結びつけば十分だ。

最後には，アルジャジーラ（Al Jazeera）のニュースをPost-readingとして読み，フランスの国際ニュースチャンネルFrance 24が報じたマクロン大統領のスピーチ映像を視聴した。その内容は「マクロン大統領がルワンダ大虐殺におけるフランスの責任を認める」というものだ。偶然この単元を扱う直前に報じられたニュースだったが，紛争が当事国のみの問題ではないこと，紛争の終結がすべての問題解決を意味するわけではないことに気づかされる教材となったはずだ。

５．成果と課題

３年２学期末に実施したアンケートの回答をもとに３年間の成果と課題をまとめる。グローバル人材としての資質を点数化することはできないため，授業者の試みを「生徒目線」で振り返ることで，授業とグローバル人材育成の結びつきを考察する。なお，アンケートはGoogleフォームにて実施し，自由記述の回答の分析にはユーザーローカルのAIテキストマイニングを使用した。

(1)「未知」との出会い

教科書の各単元について，「自分の世界が広がった（＝未知と出会った，好奇心が刺激された）か」を尋ねた。各学年の平均は，１年31.4%，２年43.9%，３年44.3%であった。

この値については，２つの相反する解釈が可能だろう。個々の題材を通して，平均40%もの生徒に新たな気づきや学びの機会を与え，知的好奇心をくすぐることができたことは授業者として非常に嬉しい。しかし，半分以上の生徒にとっては新鮮味に欠ける授業だったと言えば大いに反省すべき結果だ。授業者が３年間を通して意図的に行った取り組みに関して，「学びや理解を深める，英語力を高めるうえで『あなたにとって』プラスだったか」を尋ねたところ，「教科書外からの教材（＝題材に関する動画，統計，記事など）を活用する」ことについて82.9%がプラスだったと回答した。それなりの時間を費やして探した甲斐があったと思う反面，さまざまなオーセンティック教材を活用してもなお，大半を「未知」と遭遇させるには程遠いという現実を突きつけられる数字である。40人学級での一斉授業でどこまで可能かは未知数だが，生徒の既知の知識や問題の捉え方次第でアウトプットに幅ができるよう仕掛けているように，インプットにも幅をもたせる工夫ができるかもしれない。

(2) 育てたい生徒像

アンケートでは，授業者の意図がどの程度生徒に伝わっていたかも確認した。自由記述による回答の分析結果は以下のようになった。

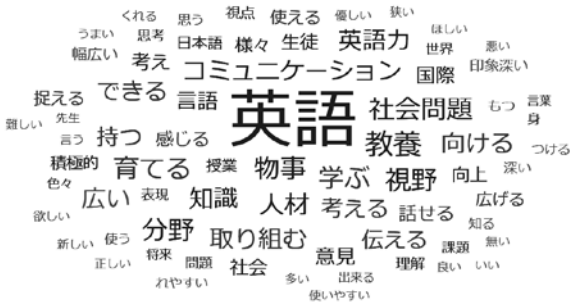

図１　「北野は授業を通してどんな人を育てたいと考えていると感じますか」ワードクラウド

文章中に出現する単語のうちスコアが高かった名詞は，「英語」を除いてスコア順に「教養（30.69）」「社会問題（19.89）」「物事（19.43）」「分野（17.88）」「視野（17.63）」である。次に，これらの単語の出現パターンに注目すると，それぞれ「教養－国際－課題」「社

会問題－多い」「物事－捉える」「分野－知識－持つ」「視野－広い」の組み合わせで共起する程度が強い（図２）。出現度上位５つ以外の単語では，「英語力―向上」「身―つける」「言葉―伝える」「世界－向ける」の共起回数が多い。

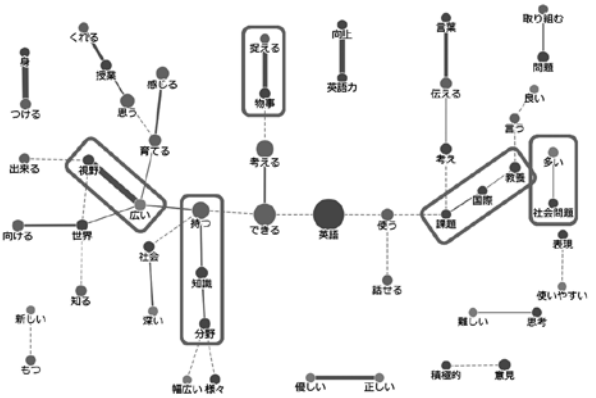

図２　「北野は授業を通してどんな人を育てたいと考えていると感じますか」共起ネットワーク

単語の出現度と共起キーワードから，授業を特徴づける要素が語彙や文法といった言語に関する知識や入試対策ではないことがわかる。入試や模試に関する単語のスコアは極めて低く，「受験（0.62）」「勉強（0.14）」であった。

以下，生徒の回答から特徴的なものを（生徒の回答をそのまま引用して）挙げる。

- 自分が置かれている立場や環境だけでなく，世界中の人達にも目を向け，思いを巡らせることができる人。
- 英語の習得だけではなく，言語の隔たりを越えて見聞を広め，他者を理解することに重きを置ける人材。
- 自分の興味関心をより深く，さらには周辺分野への知見も深めていける人間。
- 答えのない問いを諦めずに考え，視野を広くして，さまざまなバックグラウンドを持った人と社会の問題に取り組むことができる人。
- 今ある問題に対しての見識を広げてそれに対して自分の考えを持ち，相手に伝えることができる人間。
- 多様な分野，課題に対し自ら興味を持ち探究できる人。
- 世界に目を向けて物事を多面的に考えることができる人。また他の人の疑問を一緒に解決してあげようとする人。
- 世界の事象に対して広い視野と関心を持つことで，問題の発見と解決ができるような人間。
- 社会が共有する課題について 自分ごとであるという意識をもった市民。
- 何が「正しさ」なのか誰にも分からないこの世の中で，物事を様々な視点に立って自分の頭で考えることのできる，柔軟で心優しい人。

日本や世界が抱える問題を通して，それまで知らなかったことを知ってほしい，考えたことがなかったことについて考え，人に伝えてほしいという思いは確かに生徒に伝わっていたようだ。

(3) 生徒の変化

生徒の変化を知るため，以下の項目から「入学時の自分と比べて『するようになった』と感じるもの」を（複数回答可で）選んでもらった。項目と『するようになった』と回答した生徒の割合は以下の通りである。

	項目	割合
①	授業で扱った題材について，自ら学び，理解を深めようとする	30.8%
②	授業外で英語に触れる時間をつくる（単語帳，問題演習以外で）	44.4%
③	相手と協力して，よりよくコミュニケーションを図ろうとする	54.7%
④	アイコンタクトやジェスチャー，表情など非言語スキルを駆使する	59.0%
⑤	相手の表情や反応を意識しながら英語を使う	34.2%
⑥	間違いを恐れずに，英語を使おうとする	41.0%

まず，学習意欲における変化について考察する。①について，約３割の生徒にとって授業での学びがさらなる学びにつながったことは非常に嬉しい結果である。授業中，新しい情報を得ようと自主的に自分の端末で検索する姿をよく目にした。気になって調べた生徒が発見した情報がクラス全体の学びを助ける場面が幾度となくあった。瀬谷氏の単元をきっかけに，ある生徒は瀬谷氏についてもっと知りたいと思い，彼女の著書を読んだそうだ。また，別の生徒はルワンダに興味を持ち，大学生になった今年ルワンダに行ってみるそうだ。②については，日常的に多様な英語に触れるよう促したこと，特にコロナ禍に突入した２年次より，Breaking News English やBBC Learning English等の英語学習者向けサイトからおすすめのトピックを１日１本slackで紹介し続けたことも功を奏したのかもしれない。

次に，コミュニケーションへの意欲や姿勢における変化についてである。③，④より，円滑なやりとりは話し手と聞き手双方の姿勢と力量に委ねられていること，ことば以外がコミュニケーションに果たす役割が大きいことを認識する生徒が大きく増加したことがわかる。一方で，⑤の結果は，大半の生徒が相手の様子次第で伝え方を臨機応変に調整できるという域にはまだ到達していないことを示している。コロナ禍でマスクを着用した状態が続いたことも一因ではあろうが，この割合を高めるためには２つのことが必要だと考える。１つは，英語を話すこと自体への心理的ハードルを下げ，相手に意識を向ける心の余裕をもつことだ。⑥には，生徒の「間違っているかもしれない」という不安や自信のなさが伺える。普段の授業では，英語を使う必然性のない状況で英語を使っているが，日本語が通じない（＝英語を使う必然性がある）場面で，英語で相手を理解し自分を伝えることができたという経験を積ませられたらと切に願う。もう１つは，リテリングに加え，より双方向性が高いアウトプット活動を取り入れることだ。お互いの理解の程度が話の展開を左右するため，自分の伝えようとしていることが相手に理解されているかにより意識が向くと期待できる。

(4) やりがいのある授業

３年間の授業の総合評価として２つの質問をした。

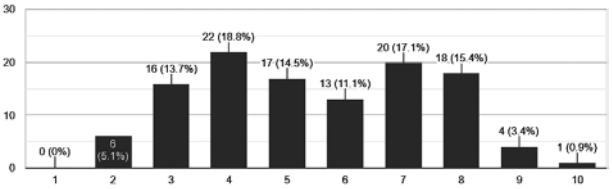

図３　授業での「問い」や「活動」の難易度はどうでしたか。（１：全く手が出ず難しかった～ 10：難なくできて簡単だった）

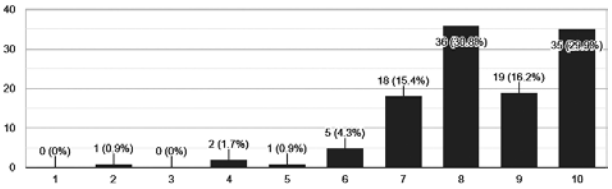

図４「頑張りがいのある授業」でしたか。（１：全くそう思わない～ 10：とてもそう思う）

難易度の感じ方には大きなばらつきがある。どんな生徒にとってもchallengingな授業をしたいと思い，答えのない問いや，自由度が高い活動を中心に授業を組み立てたため，おおよそ想定内の結果である。２つのグラフから，問いや活動の難易度自体がそれらの良し悪しを決定づける訳ではないことがわかる。生徒にとって意欲的に取り組みたいものかどうか，取り組みを通して生徒が自己の成長を実感できるかどうかが鍵であるということだ。難易度の感じ方には差があっても，これほど多くの生徒にとって「頑張りがいのある授業」になったことは大きな収穫だ。以下，生徒から寄せられた授業の感想を（生徒の回答をそのまま引用して）紹介する。

- 社会問題や，私たちが生きる未来で起こることを，一番考えた時間はこの時間だったと思う。

- 僕にとってコミュ英の時間は英語を学ぶ時間というよりも英文を通して今世界で注目されている事柄や解決すべき問題を学んだり，将来の夢や目標の材料となるものを探すような時間でした。
- 教科書にはたくさん知らないといけないことが散らばっているのだと知ることが出来ました。
- ストーリーを通して，今まで表面的にしか知らなかった事実の裏側や，全く違う見え方から考えることをしてきたと感じています。
- 授業ですることと，その授業で成長できる事，学べる事，目的がはっきりしていて，すごく受けごたえがある授業だった。
- 「英語で何を学ぶか」という本質的な部分を大切にしている（ように感じた）。
- することが多くて，集中してするからもう終わったと思うことが1番多い授業。いつも授業時間を有意義に使った感じがある。
- 世界で起こる様々な出来事にふれ，今まで知識として知っていたことを改めて実感できたり，新しい視点で事象を見ることが出来たりしました。さらに，私が知らない世界で起こる問題について詳しく知ることも出来ました。自分が知らなかったことを知れる事がとても楽しかったです。
- 自分から新しい知識を得て行こうと思えるようになりました。また，ひとつの出来事についても，へーそうなんだ。知らなかったな，で終わらせるんじゃなくて，なんでだろう，とより深く考えるようになりました。
- 授業一つ一つが丁寧に作り込まれていたし，受ける度に知見が広がる感じがして期待と，ついて行けるかという不安でドキドキしていました。授業も周りのみんなもレベルが高くて毎回ついて行くのに必死でしたが，自分にとって良い意味で刺激の多い授業でした。

６．おわりに

教材研究をすると，私自身が多くの「未知」と出会う。あれこれと情報に目を通しながら，教科書という食材をいかに調理するかを考えるのは楽しい。教師が必ずしも生徒より物知りで，気づきのアンテナが高いわけではない。授業においては生徒の知識や知的好奇心に助けられることもある。人によって既知の事実や経験は異なり，物の感じ方も違う。どんな刺激（＝「未知」との出会い）がどんな学びにつながるかは千差万別だ。生徒をわくわくさせる授業づくりは授業者にとってchallengingな仕事である。73回生からの言葉を励みに，これからもグローバル人材の育成に資する授業づくりへの挑戦を続けていきたい。教科の授業，探究活動，学校行事，部活動，課外活動など，さまざまな経験を通してグローバル人材としての資質・能力を磨いて本校を巣立っていった卒業生たちの今後の活躍が楽しみである。